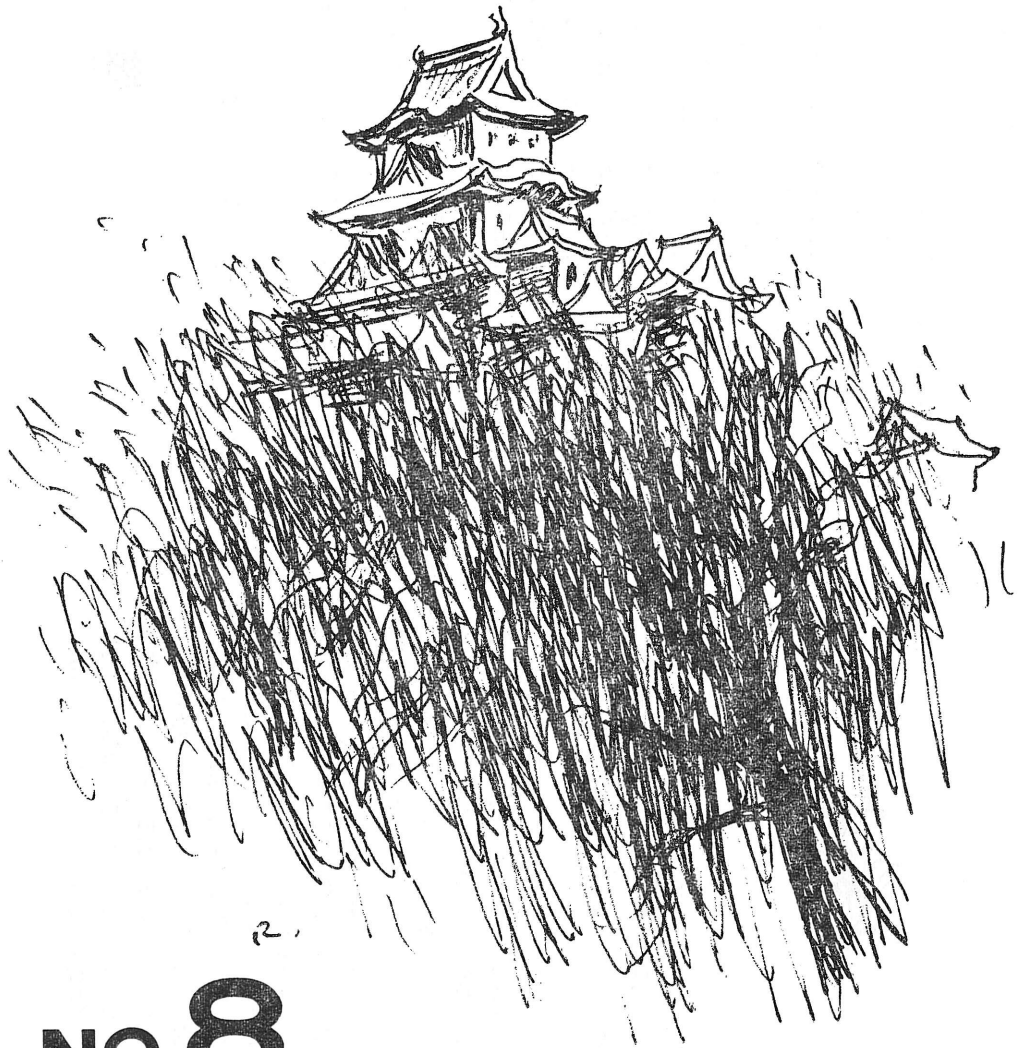


# 白城合通信



NO. 8

ご

挨拶

挨拶

理事長

安平

康（姫中38回）

白城会通信を通してご挨拶を申し上げます。

このたび、はからずも私が白城会理事長の重責をになわせていただくことになりました。

空地前理事長には昭和二十六年以来、実に二十年近い年月を理事長として、なみなみならぬご尽力を賜りました。この間、母校校舎の改築、私達待望の白城会館の竣工、本会組織づくりの強化、また各地支部会の活発化等々白城会の発展に大きく貢献されました。私達はぜひいつまでもご在任下さるよう再三お願いしたのですが、ご老齢の故をもって固くご辞退になりました。

この輝かしいご功績のあとを引継ぐには、私は生来不敏であり、とてもその才腕もございません。

多士済々の方々を会員とする本会で理事長

の器ではないことは十分自覚しておりますが幸い多年母校に奉職され同窓諸兄姉に敬慕されてお顔の広い柴垣武夫さん（姫中三四回生）と姫路商工会議所会頭として各方面でご活躍中の竹田二郎さん（姫中四五回生）のお二人が副理事長として私をお助け下さることになりました。私が空地前理事長の女房役でありましたとき、そのご寛大さに甘えて何のご助力もできなくて慙愧にたえませんのに、今回は経験豊富なベテランお二人にもたれかかってこの大役をお引受けした次第でございます。

しかし、就任いたしました以上は微力ながら最善をつくす所存でございますので、どうか皆さん、よろしく指導ご鞭撻の上、本会の発展のためご支援下さるようお願い申し上げます。

白城会の目的は会員相互の親睦が主眼であ

ります。このために会報や名簿を発行して会員の最近の消息を伝えることが何よりも大切と信じております。前回の名簿を発行してからすでに五年余を経過しましたので、この間に会員の異動も多く、また新会員の収録もはからねばなりません。そこで名簿の最近版を発行することになり、先般来、本部役員の皆さんや各支部の役員の方々に大へんなご労苦を費していただいて、お蔭で目下印刷にかかることができました。

なお名簿については広告をお願いしてご迷惑をおかけしておりますが、一定の部数を購入していただかないと単価が高くなりますので、本紙上を借りまして多数のお申込をお願い申し上げます。

ここに空地前理事長の多年にわたるご苦勞に對し心から敬意を表し、感謝を捧げ、また会員の皆さんのご活躍とご健康をお祈りしてご挨拶いたします。



# ごあいさつ

—西高に赴任して

学校長 豊岡正見

龍野高校からこの四月に転補されてきました。ご挨拶とすればまず略歴からということになりましょうか。昭和十三年に大学を出ましてから、さる新聞社の社会部の記者を二年ばかりつとめました。何か文筆生活に魅力を感じた若気のいたりといったところです。兵役を五年ほど。支那大陸で終戦、捕虜生活も味わい、帰国後教員生活、三十九年に小野高校に教頭に出ました頃から何となしに生活がまた変り始めた感じでした。教頭一年で県教育委員会の社会教育課にうつりました。教育行政などには全然無知でしたので、かなり苦労もしました。おかげで行政の裏もいささかわかせてもらいました。係長、課長補佐、主幹、主任社会教育主事と教員生活では耳なれない職名に馴染めなかったり、反ばつしたり、行政のせせこましさが嫌になったり、やはり自分はこの畑の人間じゃないなと実感

する頃に龍野高校へ校長として出ました。おかしなもので、校長生活三年ばかりの今では行政の大切さが身にしみてわかってきました。末端の現場で歯きりしても、地団駄ふんでも出来ないことが行政面の決断ですすら運ぶんだと今更ながら痛感している有様です。

龍野で二年半、学校教育一本で進んできた人とはかなり協道も通ってきたものですからひよっとすると少し変った学校経営がやれたのではないかと自画自讃の気持ちですが、さでどんなものだったでしょうか。

その点、皆様がたの母校の姫路西高は前任校以上に古い伝統と成果を背負っていますので、それを継承していくだけで筒一杯だということになりそうな気持ちでもあります。

着任一か月余の印象を申しあげてみましょう。もちろん的を射たものかどうかまだわか

りませんが、まず第一に校舎が狭隘にすぎるといふことです。中味がご馳走でも、つまりすぎては、うま味が減るといった感じでしょう。うか。もう三、四年たてば、また生徒増の時間が想予されるのにどうしたものかと今から気にかかります。施設や設備は当局の話しによりますと一〇〇パーセント近くとのつていふことになっていますが、とてもそうは思えません。それどころか欠けているところが一杯で思案投げ首の現状です。資料というものは見方によってはどうにでもなるようです。

申しあげたいことは、建物がつまりすぎているように、人間まで小さく固ってはこまるということです。まあ、そんなことはないと思います。茫洋としたところもある大きな生徒を育てたいですね。もともと、わが校の伝統はそんなところにあったのではないでしょう。か。私の中学時代の、外部からの印象では姫中といえは大きいといった感じを受けていました。建物のことではなく、すべてにスケールが大きいという意味で。

私の父親が昭和九年ごろまで本校の教師をしていました。その時、一、二度おとづれた本校の古びた校舎の印象が今の私の本校に対する親近感のもとになっていますが、この度のご縁を契機にご交誼をいただきたいと存じております。

集

特

## 姫路西高等学校

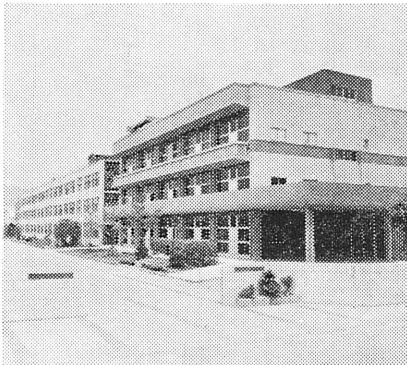
# 校舎建築の思い出

元本校校長 賀集音市

はじめに

兵庫県立姫路中学校、同姫路西高等学校は創立以來すでに百年に垂とする。この間の歴史は、単に、本校の歴史に止らず、日本の中等教育史であり、また兵庫県の教育史である。この百年史の編さんは誠に意義深いものがあると思う。私は、この百年史の編さんにつき、関係者にしばしば懇話したが、いまだその機に至らない。いずれ誰かの手によってこの著が世に出る期が来るものと思う。私は昭和二十六年四月十日より同三十一年四月十五日まで、満五カ年在職したが、百年の歴史に比べると、二十分の一に過ぎない。しかしその間に現校舎の建築が行なわれた。しかも鉄筋校舎である関係上、永久に残るものと思いい、総改築に関する思い出を筆にまかせて書きつづるが、年既に十数年を経過し、記憶も

正鵠を期しがたいが、後日、百年史編さんの資料の一端ともなれば幸いであると思う。従つてこの稿は校史としての正式のものではなく、単に私個人の思い出である。今後正史を編む者の資として残すに過ぎない。速やかに立派な百年史が生まれることを切望しつつ、



景全館本見たより門東  
(手前の建物は白城会館)

筆をとるものである。

### 一、本校旧校地校舎整備期

(一) 校地の整備

本校旧校舎は明治三十九年六月二十五日起工、同四十二年五月七日、総工費十萬一千三百八十五円六十二銭、定員六百名の規模をもつて建築されたものであり、時あたかも日露戦争直後の物資欠乏物価騰貴の時期であり、全く粗末なものであった。爾來五十一年の星霜を閲し、危険状態であり改築が唱えられていた。昭和十六年度に、学校長岡部常次郎氏が地許負担金を県に納入し、総改築の陳情に來られた。丁度その時私は県学務課に勤務し学校設置廃止の事務をも担当していたので、視学官片山久氏の相談を受け「今は戦争の最中である。折角の努力であるが、戦争の終るまで延期してはどうか」とすすめた。岡部氏もその意を諒とせられ、地許負担金はそのまま県に預けることとし、建築は延期することとした。こうした行掛りのある学校へ私が赴任するとは誠に不思議な縁である。是非これは岡部氏や地元の人々に対する申訳にも、この校舎の改築は断行しなければならぬと決意

した。しかしこれは容易な業ではなく、日露戦争よりも一層状況の悪い時期であり、十年位かからねば出来ない仕事であると考えた。

これがためには現在の生徒のためにもこのままでの状態では誠に申訳ない。生徒は二度入学し直すことは出来ない。由緒ある学校の卒業生である。まづ立派に環境を整え、あらゆる努力を払って生徒の犠牲を少くしなければならぬと考えた。そしてまづ校庭の整理より始めた。古い樹木が相当繁っていたが、それが教室の窓をふさぎ光線が入らない。さらに余り校舎に接近しているので湿気を呼び、ひとみを腐蝕させるものが多かったので思いきって切り倒した。また陰陽樹が反対になったり造庭法から考え余り見苦しいものもあったので整理した。ところが卒業生で本校に職を奉じている者から強い反対が出た。あれは何回卒業生の記念樹だ。あれは何某氏の記念樹だ。無断で切るとはけしからぬという。もつともなことであるが、追って当地は寸土を残さず掘りかえさねばならない。いちいち許可を得ることも出来ないで、止むを得なかった。また方々に散らばっていた石を集め庭作りをした。あまり庭いじりをするので生徒は私に植木屋という綽名をくれ、運動会の抽

選競争に私には植木鉢を、柴垣氏には洪柿を持って来てくれた。しかしこれも喜んで受け取った。

東校門から玄関前まで整理し、芝生を植えると生徒も大分わかって来たらしく、賀集バラダイス等と言って喜んでくれた。さらに校内を通る水路のヘドロの掃除もし、二十六年七月二日の大雨で運動場に五十糎の水たまりが出来た。これを機会に運動場の排水工事および、運動場東側の排水溝の新設もやった。私の考えたのは、いづれ校舎改築には校地は全部掘りかえさねばならぬ。今整理するのは徒労のようであるが、今の生徒のためを思えばこのままで置くことは出来ない。記念樹も記念石も、その時にそれぞれの位置に永久に残るよう計画を持ってやったのである。今になって始めて我々の意のある所を了解してくれたと思う。いづれにしてもこれは全く序の口である。将来は建坪三千坪の校舎を建てることを夢みつつやったことである。

#### (二) 校舎の整備

前述のごとく本校舎は将に危険に瀕している。雨漏りは教室内でも傘をささねばならぬ状態であった。幸い、飯野前校長が予算を請求してあったので夏休を利用して本館の屋根

の葺替えをしようと思い、天井裏へ上って見たが、屋でも丁度夜空に星を眺めるように、どの教室も空が点々と見えた。丁度休中に屋根替えが終わったがこれが大変であった。

校舎の危険性を度々県に申し出たが一向に見にも来てくれない。それでは自分で詳細な検査をやらうと思ひ、専門家を呼んで全校舎の精密検査を行なった。もちろん授業中は全く出来ない仕事であったので、殆ど毎日曜日に職人と特約して調査を進めた。まづ床下に這い込み土台の腐蝕の程度を調べ、さらに天井に上って一階の梁を調べたが割目が多く全然用をなさない物が五、六本あった。二階の天井へ上って梁と柱の關係を見たが、柱が梁より抜け落ちていた所が三カ所もあった。それがために校舎の中央部がひどく下って今にも落ちそうであった。こうして調べて見ると職員室の上が最も危険であり、東の端、西の端の教室も危険であった。生徒は私に、天上人（殿上人か）という尊い綽名をくれていた様だが、どう致しまして、天上人ではなく床下人であり、同じ天上人でも天上ではなく、天井人であった。うつかり綽名はつけられないものだ。さらに外部のバトレス（つかい棒）を見ると、南の方が浮き上り、北の方は

ずり込んで北へ向って大きく傾いており、二階の廊下は波を打っている状態であった。この様子を詳細に図面に表し、昭和二十七年九月始め県教委へ提出した。「この様子では到底生徒の生命を保証することは出来ない。早急に改築を断行してもらいたい」と申し入れた。この結果を見て県教委も今までの怠慢を強く反省したらしく、須貝課長は、「こうして出されると黙って見過す訳には行かない。早速当方からも調査に出る」との事であった。かくて昭和二十七年九月五日育友会理事會を開き校舎の説明とともに総改築促進の決議をし、九月十二日育友会評議員會を開き同趣旨の決議をした。しかしなかなか視察にも調査にも来ないので當繕課長に直接談判をしたが、課長は今急に総改築をやれと言っても到底やれそうにない。パットレス等入れても何の役にも立たない。これは全く素人だましで利き目などない。やるなら一階の天井をめぐって全部の梁を支える様な木を入れ、教室のど真中に柱を立てて丁字型に支えるより外方はない。それでも倒れるまでに逃げ出す位の時間は持つであろう、とのこと。かくて昭和二十七年は過ぎ、二十八年年度の予算期になり、二月三日、文教委員、総務部長、教育長

学務課長等が視察に来校、さらに二月九日は教育委員、教育長の学校視察があった。その都度地元県會議員として矢野善寛氏が案内役を勤められた。私は本校全体の狂い状態を詳細に説明し、現場案内をしたが、最もひどい東端教室へ案内し、教室の中央部で足で床を揺り振動させた。視察者はびっくりして、「もうわかった、わかった」と言って逃げ出した。さらに中央部の狂った所の壁を揺ってこれを振動させたが、「もうええ、もうええ」と言って止めた。かくて現状を認めた視察者は二十八年度に大補強工事をすることを決め予算を組んだ。しかしそれまでは最も狂っている三教室の使用禁止となった。全部で二十五学級に対し普通教室十八教室、その中三教室が使用禁止となれば授業は完全に行なわれない状態となった。昭和二十八年七月十四日職員室、事務室、校長室を講堂に移転し、本館全体の大補強工事を始めた。夏休中に何とか完了する様、請負業者も固い約束をしたがいよいよ工事にかかって見ると案外なことが起った。一階の天井を全部めくると、二階教室の床の隙間から落したごみが、天井にひついて取れない。無理をしてこすり落したごみがトラック三台分あった。こんな事は全く

予想もしていなかったと請負業者も苦笑していた。その間現場監督も来ていたが私も毎日現場で監督は怠らなかつた。九月一日、運動場で第二学期の始業式を行ない、九月十日よりしばらく普通の授業を行なうことが出来た。教室の真中に大きな柱のある前代未聞の教室で授業をしたが、生徒には黒板の字の見えない場所があり、頭を振り振り授業を受ける者があって、本当にかわいそうな状態であった。

## 二、校舎総改築促進運動期

### (一) 県に対する運動

本校舎の総改築促進の運動は十数年前より強く行なわれていたことであり、本校の現状を知る者は誰も賛成しているのである。戦争と云う人間最大の不幸のため延期されているのであるが、今となれば敗戦という一層不幸な状態であり、その上兵庫県が財政整理団体に指定され、学校の増改築一切中止の状態にある。これを突破することは、普通的手段や常識では到底なし得ない事であった。全教室の使用禁止となれば如何ともし難いと前述の如く、昭和二十七年九月十二日、育友會が

満場一致で校舎改築の決議をなし、育友会長横田武夫氏、白城会長空地純一氏に姫路市長石見元秀氏を始め印南郡、飾磨郡、神崎郡の町村長が一致団結、陳情書を知事、副知事を始とし県下の議員諸公等五十八名に提出した。

一方私は県庁に日参し、回数も数え切れないうほど行なった。そして県教委を始め県会計課長、総務部長に直接話し合った。ことに総務部長馬俊夫氏は旧知の間柄であり、私の県庁在勤中は同課であった関係で、思い切った意見も出し合った。ある時は「今は戦後で屋根のない学校で勉強している所もあるじゃないか、西校は古くとも屋根があるのはまだよい方だ」と言う。私は「屋根があるから危いのだ。屋根のない学校の方が安全だ」とやり返した。またある時は「どんな計画だ」と聞くから「鉄筋で三千坪」と言う。「それはとんでもない。木造で結構だ」「いや鉄筋で」と繰り返していると「そんなに鉄筋の学校に住みたいのなら、神戸の学校へ転任してくれ」と言う。私は「命令ならば何時でも転任する。しかし私が転任しても西校の鉄筋の要求は変らない」とやり返し、こんな問題が繰返された。

かくて昭和二十七年は暮れ二十八年となった。二十八年度は学校の補強に明け暮れ一歩も改築には進まない。二十八年は二月に二月十月に一回県の視察があり、十一月二十八日に県会総務委員会、十二月三日、県土木建築委員と、これで五回の視察があった。その際、龍田敬太郎氏、空地純一氏等も出席されたが総務委員会の視察の際、石見元秀市長は、「自分の子供が何時タンカでかついで来られるか判らぬ様な学校へはどうしてやれるか」とまで言って詰め寄られる場面もあった。しかし県としてはまだどの学校にも手を出していないので頑として応じなかった。

しかし各方面の運動が幾分効を奏したのか昭和二十九年年度予算に四〇〇万円の予算を組んでくれた。これは総改築とは名のみで、全然実施する考えではなく、ともかくも近い将来姫路西高を改築すると言う意志表示をしたに過ぎない。しかしこれにより県の態度だけは確認されたので、今後はその増額に努力する方面となった。ここまで来るのには矢野県会議員の非常な努力があったのであり、深く感謝する所である。

#### (二) 文部省への運動

当時は義務教育諸学校の危険校舎にはその



旧講堂（現在は格技場）

改築に対し国庫補助があったが、高等学校に對してはまだその道が開かれていなかった。しかし何とかして高等学校にもこれを適用する様、法の改正をしてもらいたいと、文部省の助成課に陳情に行った。助成課長に会い、姫路西高の現状を説明しようとしたが課長は「そんな問題は県庁がやることで学校長は学校に居ればよいのだ」との話「学校長が学校に居て自分の校舎が完成するならば、わざわざ東京まで来ません。この状態を見て下さい、実は県教委の係の者も来ています。現状は私が最もよく承知しているので説明に来た訳です」と、むかむかする気持ちをおさえ、

県教委の係も一緒になって説明した。先方も段々納得したが、「法律上今の処、何とも返事が出来ない」と言うことであつた。しかし法改正の運動が各方面に起つてゐることが明かになり、山口県の教委が中心となりこの運動を推進してゐたので、文部省の裏にある山口県の出張所に行き、是非法改正の運動を促進する様、我々も大いに協力するからと言つて、兵庫県および本校の現状を説明した。お蔭で昭和二十八年八月二十七日、公立高等学校危険建築物改築臨時措置法が制定され、恐らくその法適用の最初の学校として、わが姫路西校が昭和三十年度に六〇〇万円の補助を獲得したのであつた。

### 三、校地校舎決定期

#### (一) 校舎の位置決定

総改築の時期は全く未定であるが、私としては早くから校舎の輪郭は決定して置かねばならぬと考え、研究を進めていた。昭和十六・七年頃の改築では、木造であり現運動場に新校舎を建て、完成後校舎跡を運動場に切り替へることであり、県の方でもこの案であつた。しかし私はこの案には賛成出来なかつた。前述の如く長期計画であるから、全く別

の所に建て、完成までは教育に一切支障を来さないこと。また鉄筋とすれば現運動場では狭すぎる。そして今後は必ず鉄筋でなければならぬと決心してゐたので、全く別の所、即ち現在完成してゐる位置に持つて行くべきであると決意した。それには新しく校地を拡張しなければならぬ。従つて校地の買収を必要とする。これも内偵を進めていた。

#### (二) 校地及び周囲の道路の決定

右の案に従ひ校地校門の決定を先決しなければならぬ。それにはまず姫路市の道路計画をも十分参酌しなければならぬので、姫路市長に対し次の如く諮問した。

姫西庶第六八号

昭和二十九年五月十四日 学校長

姫路市長 石見元秀殿

姫路市、伊伝居八代方面。都市計画および道路水道予定線の指示。ならびに道路新設排水路、河川改修方陳情に関する件。

として校地周囲の道路の幅員、配水管、排水路および大野谷川の改修をも併せ陳情した。

これに対し、昭和二十九年六月十日、詳細な指示があつた。これを参酌し、少々校地を狭くしても道路は十分広くとるべきだと考え

校地の東側道路は十二坪、南側道路は八坪とし、西側道路は市の方において十五坪とする。校門は西側とし東に通用門を造ることに決めた。このために校地東側および南側、五百三十六坪二合六勺を姫路市に無償払下げとし、工事は市において行なう様石見市長に依頼し、心よく引受けてくれたが、県は校地を無償払下げた例はないとし、容易に応じなかつた。私が校舎建築で最も苦労したのはこの道路計画であつた。しかし随分推し強く県と交渉し、たびたび県の管財課も実地調査をした。結局納得させ現在の如く校舎の周囲は完全な幅員を持つた道路となつた。そのため国府寺時代の学校から持つて来た楠木二本を移植した。活着して居たが再度の移植でとうとう枯らしてしまつたのは残念である。かれこれしてゐた結果手続の完了したのは昭和三十四年二月十六日であつた。

#### (三) 校地の買収

右の通り校地の決定に伴ない、校地の拡張が必要となり、北に向つて三段九畝二十五歩を購入することとなつた。この土地の所有者は、砥堀龜松、菊本きよの、中尾勝男、三木晴夫、砥堀常夫および小池いくゑさんの五人であつた。調査の結果元沢田政治氏の所有で

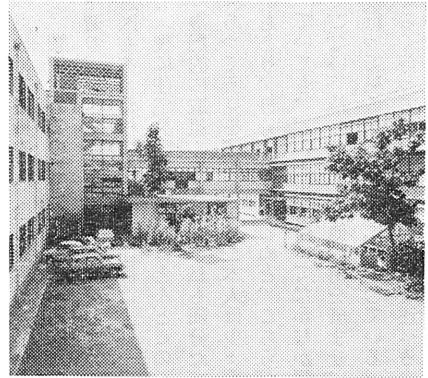


あったものと判り、沢田氏に交渉依頼した。快諾されて種々交渉を重ねられたが、小池いくゑさんを除き坪一千円で話がまとまり購入することに決めた。これ等の方々を学校に招き感謝の意を表した。小池いくゑさんに対しては私が別に交渉し漸くこれもまとまった。また、横田宗直氏の所有のままになっていた土地二畝二十八歩も、この際一括学校の所有とし、昭和三十年十二月二十六日金の支払をなし、昭和三十一年五月十九日、県に寄付採納手続をとった。これ等の代価はいずれも皆育友会の会計を以ってし、その都度理事会の議を経たので相当手間だったのである。

#### 四、全校舎設計期

##### (一) 他府県の視察

全校舎を鉄筋で造ることは、兵庫県においては戦後始めてである。私も出来る限り合理的なものを造ろうと考へ、東京都、神奈川県、愛知県、大阪府、広島県に照会し、鉄筋校舎を視察した。しかし行つて見ると、古い型の鉄筋が、戦後のものは進駐軍の指導によって出来たもので、我が国の風土にも教育事情にも合はない、不都合なものばかりであり、これを使っている学校当局の批判を聞いて見た



中庭

が、いずれも極めて不満が多かった。そして日本をつくる学校は日本人の性格に合わねばならぬことを熟々感じ、反対の意味において非常に参考になった。

##### (二) 本校校舎設計の方針

- (1) 校地は現校地とする。
- (2) 現地を北方に約一千七十三坪拡張し、総坪数を一万一千五百坪とする。
- (3) 運動場は約六千五百坪とする。
- (4) 新校舎は現校舎より離し、校地の北方に建築する。
- (5) 校舎は鉄筋コンクリート四階建とし、中央に校舎、東部に講堂、西部に体育館

を建てる。

- (6) 建坪約三千坪、教室三六、講堂、体育館、管理部諸室およびその他必要な施設をする。

- (7) 校門は東西二カ所とし、西部を正門とし、両門は校内道路で結び、運動場は独立させる。

- (8) 校舎建築の基本方針

- (イ) 学校の伝統、性格、特性等精神的要素を尊重する。

- (ロ) 教育課程の将来性を考慮し、普通性と永遠性とともに変化即応の構造をとる。

- (ハ) 経営学の原則を適用し、科学的検討を加え、最高能率を發揮する様考慮する。

- (ニ) 地域社会の要求と利用とを考慮する。

- (ホ) 経費の節約を図る。

- (9) 教室および各室配置の方針

- (イ) 校舎の分散型とする。
- (ロ) 教室の親近性、共通性、ブロック性、生徒移動の単位等を考慮する。
- (ハ) 生徒一日の生活様式に即応するよう施設する。

(二) 校長室 学校の性格と精神とを表現する様工夫し、学校全体の情況が直ちに把握し得られる位置をとり、内部は国旗、校旗、学校沿革史、卒業生名簿、生徒職員名簿の保管および校是、校訓、校歌の掲揚等の施設をする。しかも職員生徒となるべく接近し得られるよう工夫し柔かく親しみ易い室とする。

(三) 職員室 校舎の中央に置き、各教室に対し最短距離に位置し、教師の作業場として最も能率的であること。校内で最も健康的であること、内部に生徒との談話をする室を作ること。

(四) 事務室 校内事務の処理と共に、サービスの中心、涉外施設の中心となる様施設する。事務室の一部に校内センターを設け、電話の交換、放送等一切の情報事務を処理する場所をつくること。

(10) 夜間学校が独立した学校として運営される様、右に準じた施設をすること。

大体右の方針で設計し県教委に提出した。県教委も「こんな大きな問題を即座に決定は出来ないし、普通日では検討する時間がな

い。日曜日にゆっくり研究しよう」とのこと。で係の者の熱心さに感心したので日時を打合せ日曜日終日かかって研究した。教委の方も全部鉄筋でやる考えであったので案外早く交渉が進んだ。さらにそれを基として青写真をとり、県営繕課へ提出した。

#### (四) 県営繕課の設計

県の営繕課長は姫路西高の現状は十分承知している、何時改築するか分らないのに全体設計をやってみようとのことである。こんなことは全く珍らしいので、普通ならば予算も決定し、いよいよ追らなければ設計等にはかからないのであるが、神田省三課長はその点極めて積極的で、全く感謝の外なかった。戦後始めてのことだから、模範的なものを造り、県営繕課の手腕をも発揮しようとの意図もあった様である。主任係は小林一夫氏で(後に住宅公団に転勤)ほとんどこの設計に専門的に取組んでくれた。私も随分たびたびあって所見を述べたが、ご本人は少々変な所もあり、自分の気に喰わぬと、こちらが行っていても、ぶいと出て行ってなかなか帰ってこない。待ちあぐんで他の用を済ませ、午後行って見るとまた仕事に熱中している。しばらく待ってご機嫌を伺い所見を述べる次第

であった。度々こんなこともあるので課長に小言を申込むと、神田課長は、当課としては最も頭の優れたやり手を廻しているのだ。そうせかせか言わないでほしい」とのこと。私も小林氏の気心も判って来たのでその積りで接した。ぶいと外出するのは、ある一部を考えて出来ないかと外出し、喫茶店へでもはいり、一人でゆっくり考えるのだそう、西高玄関の構造等もそれだけで幾日かをついやして考えたそうである。随分永く考えて詳細な設計が出来たが、後に経費の都合や物価の騒動で設計変更となり、大切な所が切り捨てられたのは誠に残念であった。私は小林氏の技術者としてのこの態度に深く敬意を表する次第である。

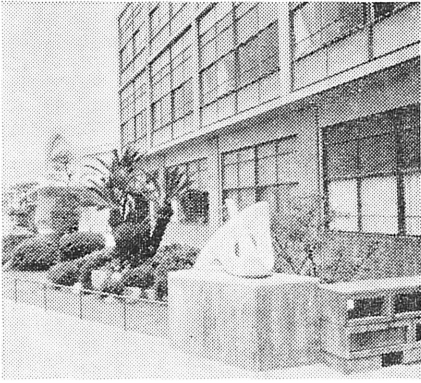
### 五、総改築決定とその前後

昭和二十九年に入り、谷本副知事(本校第三十五回卒業)岸田知事、県文教委員等十七名、教育委員等視察者が相次ぎ、応接に少々疲れたが、校舎の改築はいまだ何とも決定しない。その中に知事の交替があり、矢野県会議員も革新系知事に弾劾演説をする等学校としては不利な条件が続き行き悩みの状態とな

った。

#### (一) 阪本勝知事の来校

我々も随分努力したが、今年も駄目かな！  
と思っていたやさき、二月二十一日の夜、育友会の副会長笹尾誠一氏より電話があり、阪本知事が兵庫県祝祭のため今夜姫路まで来られ旅館に泊られる。明朝出発前に姫路西高を是非見てくれと頼んだ、寄ってくれるからの積りで。とのこと。翌二十二日始業前に笹尾氏と知事と二人で、全く非公式に祝祭された。私は例の通り校舎全体、各部の欠陥を詳細に説明した。知事は「幾ら金がないとてこんな学校をそのままにして置くことがあるも



玄関前

のか、直ぐ改築しよう」と即決せられた。

特に寒い日の早朝、わざわざお立寄り下さった阪本知事さんに心から感謝するとともに、ここまで無理やりにお願ひして下さいた笹尾氏のご尽力に対しても満腔の感謝を表する次第である。岸田知事の時代、如何に運動してもはかどらなかつた改築が漸くその緒についた感じで、やれやれと言つた気持ちであつた。後日「阪本知事は寝巻のまま学校へ乗られたそうな」等、とんでもないうわさが立つたが決してそんなことはない。立派な服装で来られたのであるが、善意のあまりそんなうわさまで出たので寧ろ感謝している次第である。

#### (二) 予算の成立

三十年度の予算はすでに出来ていたので何とも致し方なく六月県会で追加予算として出すこととなつた。三月の県会期中の文教委員会に矢野県議の紹介で陳情にも行き運動は少しも緩めなかつたが六月県会に漸く予算が成立した。その財源には地元負担金六〇〇万円、去年の繰越金四〇〇万円、それに高等学校危険校舎改築補助金六〇〇万円、起債二、〇〇〇万円等になつてゐた。この国庫補助金は前述のごとく我々が文部省に対する運動が効を

奏したものであり、今後この例が各方面に適用される様になつた。六月県会で予算が成立し、直ちに起工することが出来たのは前述の通り前もって設計が出来ていたからであつて、この点神田課長に対しても深甚な感謝を表する次第である。かくて昭和三十年八月十六日入札、平錦組に落札、九月三日起工式、三月三十一日竣工との契約が成立した。

### 六、第一期工事期

#### (一) 起工式

昭和三十年九月三日午前十時より校庭北部の現地において総社宮司齊主となり、修葺、降神之儀、献饌、祝詞奏上、地鎮之儀、神楽奉納、玉串奉奠、撒饌、昇神之儀と所定の法式に依り行われたが、当時は日米講和条約発効（昭和二十七年四月二十八日）後、日も浅く、特に学校において宗教的儀式を行なうことは禁じられていた。そのため全校生徒職員の参列はどうか、という問題もあつた。しかし私は教育上より考えて、日本人として日本古来の儀式を見せておく必要がある。それで見学と言う名目で全員参加させた。しかし儀式に参加するのではなく、見学するのであ

る。特に日本音楽として神楽をも見せる必要がある。特に神楽奉納をも加えた。いかなる宗教でも、宗教的儀式の行なわれる場合は、人間的儀礼として、敬意を表するのが当然であるから、降神之儀と昇神之儀に際しては起立し敬意を表することとした。式後講堂において直会が行なわれ無事終了し、数年間努力を続けたこの大事業も漸くその緒についたので安堵した。

#### (一) 第一期工事概要

鉄筋三階建 延五八二坪、普通教室 一七、

昇降口 一、便所洗面所 三

請負業者 平錦組

請負額 三千四百三十九万七千円

現場監督 足立英雄氏(姫中第五回卒業)

#### (二) 地元負担金

兵庫県では従来、校地の拡張、校舎の新築等には受益者負担として一定額の寄付を要求されることになっていた。姫路西校も校舎改築には必ず負担があるものと考え、当時の育友会長横田武夫氏が主唱され、昭和二十六年度より一人月額一〇〇円、新入学期に一、〇〇〇円程度の金を校舎改築基金として積立をすることとなった。今から考えると随分無謀なことであるが、当時これを思い切った断行

された横田会長のご英断に対し、深く感謝する所である。この金が昭和二十九年年度末には約五〇〇万円となっていたのであるが、横田氏は昭和二十七年で辞任され龍田敬太郎氏が後を継がれたのである。

校舎の改築の改築が進むにつれ、地元負担金が問題となったが、今まではすべて木造建築であったので建築費の一割に当り、校地拡張は工事費を含め全額負担となっていた。しかしに県経済の関係と鉄筋と言う特に経費の多くかかる作業のため、二割負担を命ぜられた。これには相当強い抵抗を感じたがどうしてもやらなければ県教委は改築にかかれないうこととあり、止むを得ず育友会の了解を得てそれを承認した。県教委も地元負担をさせることは会計課とすでに談合が済んでいる様でいかとも致し方なかった。そのため地元負担金は第一期工事、校地拡張合わせて、八百七万三千九百七十円となった。この半額は育友会の積立金より支出するが、半額は地元姫路市より支出を願うこととなり、直接石見市長にお目にかかり懇請したが快く引受けてくれた。と同時に本校出身で市会議員として活躍されている方々にお集り願って同じく懇請した。いよいよ工事が始まるとその出来高

に応じ、金を支払わねばならないので、県の方からまず地元負担金より先に支払えとの事、私は県の金が足らない時に地元負担金を出すべきではないかと頑張ったが、県には金がない。と押問答の末地元負担を先に出すこととなり、全く私営工事の様な行き方になった。

#### (三) 総額地元立替払と龍田育友会長の力

さらに地元としては大きな問題が起きた。それは地元負担金のみではなく、今回の建築に関する経費全額を地元で立替払をしてほしいとのことである。県の予算の財源が起債と国庫補助になっているが、一応許可は出ているが現金の来るのは年度末出納閉鎖の頃となると言う。これは矢野県会議員を通じて聞いてはいたが、須貝部長より正式に聞いたのは始めてである。これが出来なければ工事中の中止より外方法はないと言う。やむおえず引受けた。帰って直ちに育友会長龍田敬太郎氏に話したが、神戸銀行で借りるより外方法はないが、理事に相談してからにしようとのこと。早速理事会に相談されたが、誰も発言しない。会長より神戸銀行で借入れる様提案されようやく了解が得られた。龍田会長より神戸銀行姫路支店長に一応話された様であるが、

私が銀行に行つて二千万円借りる旨申込んだが、学校の建築計画、県の予算書、県教委の期日に必ず返済するとの確約書を出せと言う。私は即日県教委でその旨話したが、須貝部長は、支払するとの確約書は県会の了解がなければ出せないと言ふ。仕方なく帰りに神戸銀行に立寄りその旨話したが、確約書がなければ貸せない。そればかりでなく、二千万円もの金は本店の了解がなければ貸せないと言ふ。また本店へ行つてその旨申入れたが、よく調査してと言ふ。その間本店は県会計課に行きよく調査したらしい。その時会計課では、そんな支払確約書は全然出せない。第一姫路西高の予算は財源が起債、国庫補助金、地元負担金等となつており、この金が入金しなければ成立しない。そんなものに支払確約書等一切出せない。予算は予算で、予算と支払とは別である、と言ふ。こうした事情で全く行き詰つてしまつた。私はその間約十日間は毎日県と地元とを往復して努力したが、遂に力および再び龍田会長を訪ね右の次第を話した。会長はそれではもう一度神戸銀行へ一緒に行こうとのことで、翌日銀行まで行った。

支店長に会うと「西高の金どうなつたんか

いな」「はい承知致しました」「なんで、そないむつつかしゅう言うんじやいな。銀行は金を貸すのが仕事でないのかいな」「ああ承知いたしました」「借りたろうと言うんじやから貸したらどうじやいな」「はい承知致しました」と言う問答が取りかわされて、即時契約が成立した。用紙を出してすぐ記入してくれとの事であるが、私はまだ借金をしたことがないので書き方がわからない。致し方なく引き下つた。前以つて理事会で話し合いが出来ていたので、龍田敬太郎、田尻辰夫、それに私と三人の連名で二千万円の借金をした。しかしこれは全く個人として借りたので、育友会長とも校長とも書いていない。私は全くの文なして万二県の支払が出来ない時は龍田、田尻の二個人で支払はねばならぬのであるが、何の担保も証明もなく、これだけの金で借りられたのは全く龍田会長のお力によるもので、今もなおその御人徳に深い感謝と感銘をしている次第である。しかし一度借りた金は一応神戸銀行に預け、工事の出来だかに応じて支払うのであるが、七八〇万円は地元負担金として石見市長、龍田敬太郎、空地純一の三氏により県教委に、次に九五万円、一、七九八万円は龍田敬太郎、田尻辰夫と私との

名前で県に納入するのであるが、これは極めて複雑な手続で、平綿組から請求書が県に出され、県が工事の進捗状態を検査し、県から私に通知があり、私は神戸銀行で借金を引出し、それを持って県教委に走り、県教委はこれを控え、県会計に提出し、県はこれを県金庫に入れ、県の金として請負者に支払う、平綿組はこの金券を神戸銀行姫路支店で受け取る段取りである。これだけ手数のかかる支払を昭和三十年十二月二十八日の出納閉鎖の日、平綿が私の後についてまわるので全く気が気でない。やっと金を渡した時はやれやれと言ふ気持ちであつた。これだけの苦勞をさせるのであるから、県に金がなくて立替させらるならば少くとも教育長が自ら出て来て、地元の人々の前で頭を下げて依頼すべきである。それを校長一人呼び出して金の苦面をせよ、その利息もそちらで支払えと言つて済ませていることは誠に遺憾であつた。それにしても龍田会長のお力には全く敬服の外なく、なおこの外、いろいろ筆舌に尽せないお世話になつたのであるが、建築以外の事でもあり、これは他の機会に述べさせて頂きたいと思ふ。

田 竣工

昭和三十一年四月十五日私は停年退職となり、後を竹浪友二郎校長に引継いだ。この後始末は大変なことと思う。五月末日に起債が債券で返してくれた。竹浪校長は新任早々でありこの債券を売りさばかねばならなかったが、また龍田育友会長のお骨折りで神戸銀行が全部引受けてくれた。出納閉鎖までに漸く始末がつき九万一千余円の残金が出たが、これは第二期工事からの地元負担金となるべきものである。

かくて昭和三十一年六月十五日漸く竣工したが当時はすでに私は校長ではなかった。このことをも考えていたので第八回卒業生諸君には未完成の校舎ではあったが一同を連れて新校舎へ上って見た。遠くの見渡される屋上から完成の日を夢みつつ語り合ったのであった。竹浪校長はわざわざ連絡をして下さったので当日私は出席し、全校生集合の前で竣工を祝い、校舎の屋上にある塔に、停雲閣と命名した。引続き校舎の引越しをしたが、全校生が一生懸命に用具類を運ぶのを見、永い間の苦勞もようやく報いられ安堵の気持ちでいっぱいであった。

## 七、第二期工事期

第二期工事の予算設計はすでに出来ていたのであるが、急に鉄類の暴騒があり、当時の育友会長斉藤益雄氏のご尽力により鉄材の先行買収の方法で手に入れ、落札を待っていたが、ようやく再び平錦に落札した。しかしそれまでに県教委との交渉でついに設計変更となった。大体夜間学校の設備を全廃し、さらに玄関および生徒会用の諸室を廃することになった。当時の会長および副会長笹尾誠一氏が反対陳情のため上県し、県教委と強硬な交渉に入ったが、教育長、総務部長等も強硬にこれを主張し、お互に譲らなかった。午後より始めたのでついに夜にはいり、九時頃ようやく県教委も折れて、結局玄関の縮小だけは思い止まることとなり、現在の形態を保つことが出来たのである。いよいよ建築にかかったのであるが中途で平錦組が破産し工事を中止することとなったが、幸その下請をしていた高見氏が後を引受けようやく完成にいたったと言う。誠に曲折の多い工事であった。かくて昭和三十三年二月竣工したが、笹尾氏は本校工事については全く隠れた功労者で深く感謝する所である。

## 八、第三・四期工事期

ようやく南校舎が出来たが、特別教室はまだ旧校舎であった。しかし土地増成が済んでいないので第三期工事が遅れた。その中に商業科の廃止、生徒募集停止となり、そのため県教委は学校の縮小とみなし、設計変更をして校舎の縮小、四階建の縮小等極度の削減を図ろうとした。竹浪校長よりそのことを聞き、私は早速上県、営繕課に出頭、千葉文雄課長に面談した。設計を見ると南北校舎を連絡する廊下が教室の中央に当り、曲った廊下をつけることになっていたので、これは全く心外だ。是非設計を変更するよう要求した。しかし予算がないと言う。「予算がなければどんな設計でもするのか、技術家としての良心は何処にあるのか」ところでも随分論戦したが、私は、「予算は当方で作るから」と言って打切り、教委へ行き須貝部長にあり、右の次第を話した。須貝部長もようやく理解したらしく「あなたの言われるのももっともだ。それでは予算を作るう。しかし他校の予算をとることは出来ないから、廊下の部分は一応中止し、さらに校内道路を止め、これ等一切を教室の拡張にまわし、適当な時期に廊

下をつけよう」とのことであろうがこの問題は解決した。しかし第四期の工事は私の病気の間に出来ていたので、現在の廊下は最初の予定よりは縮小されてしまい、便所の東側につけるべきものが西側になり、誠に不細工な形となった。また四階建て設計していたものを三階建てとしたため、屋上への昇降口もなく全く全体の構造が狂ってしまった。然るに昭和三十九年には生徒の急増により、六教室の増築となり、最初の設計通りやっておればこんな不体裁な建築とならずに済んだのである。これ等は全く全体計画のないその場仕事の結果であり、残念至極な次第である。

## 九、講堂と白城会館

最初県営繕課で設計した時は北校舎は四階となり、これに体育館講堂とが加っていた。しかし生徒減少を名目として北校舎は三階となった。北校舎の四階は陳列室としてあったが、これは白城会館になる予定であった。それがために白城会には是非とも講堂を建てていただきたい希望を持っていた。高等学校には是非講堂が必要である。宗教学校等は教育の中心は講堂である。公立学校においても情操教育、クラブ活動、諸種の課外運動、全体

教育等は講堂がなければ到底行なわれない。体育館との併用ではどちらも完全に行なわれない。用意と後片付けに二時間もかかる様では時間割に組んで授業することは出来ない。「一年に二度三度しか使わない講堂等いらない」と言う人があるそうだが、それは現在の高等学校教育を知らない者の言である。しかし、最初白城会に講堂の寄付をお願いした時、思い切って建てて置かなかったので今となっては、物価の騰貴と四階の削減によって、すでに建築の機を失し、到底建たなくなっている。もしあの時講堂を建てていたら、明石高等学校のごとく地元負担なしで体育館が建ち、両方を持つ学校となっていたであろう。

誠に残念なことであるが致し方ない。しかし私には今なお講堂の必要性の考えは決して変っていない。何時の時か実現の日が来ると思う。講堂の代りに我が校には立派な白城会館、図書館、食堂が出来、学校としては非常に便利になっている。この点は寧ろ幸福かとも思う。白城会館の建設に対し、終始非常な努力を払われた空地純一理事長に対し、満腔の敬意と感謝の意を表する次第である。

## おわりに

校舎建築に関し私の関係したのは寧ろその準備期であり、實際建てたのは第一期分のみである。しかしそれまでの苦労は容易ではなく、この仕事のため、真の教育者としての仕事は十分出来なく、方針、計画等私がやったがその実施は教頭としての柴垣武夫氏にまかせた。柴垣氏は永年本校の教員であり、万事承知していたので、私は全く後顧のうれいなくこの仕事に没頭することが出来た。また、この仕事に関し関係者からの視察がしばしばであり、その都度育友会長としての龍田氏、同窓会長としての空地氏が必ず出席され、懇切な運動を続けられた。今は亡き矢野氏と右御両氏に対し、衷心より敬意と感謝の意を表したい。なおこの仕事については殆んど私の独断でやったことが多く、職員各位の意見を聞くことも余りしなかった。これは学校の性質上、先生は専ら生徒を教えることに熱中すべきで、建築等の雑務に勢力を勞することを避けたかったのである。また私には県の仕事、西播地区の仕事と、二十幾つの役職があり、そのため、生徒諸君と親しく交る機会が少なかったのが何より残念であった。ここに当時の在校生や卒業生諸君に深く謝し、将来のご発展を祈りつつ筆を置きたいと思う。

# 「南極旅行雑感」

広瀬 政美 (姫中39回)



エバンス岬スコット小屋前

地球の三極地帯といわれる北極圏とヒマラヤ・エベレスト地域を見た私には南極への希望の夢はいつ実現することかと思っていたところ全く偶然の機会にめぐまれ、この一月末より三月始めにかけて米国ニューヨークに事務所をもつノールウエー系の米国人で世界の秘境や極地に専門家をつれてゆくリンドブラッドの企画で七ヶ国の五十三名の者達に加わり南極大陸に行く事が出来ました。今までに民間人として隊をつくって三回程アメリカで

実行したのはアルゼンチンの海軍の世話で南米に近い南極半島に行ったのみで軍艦は居住性が悪く軍律もあることなので民間人のみで計画をたて、船を作るうということになり一九六九年暮れに二千五百トンの純客船の砕氷船をフィンランドのニシタッド造船所で造り初めて新西蘭よりロス海に入りアメリカ基地のマクマードそしてニュージランド基地スコットベースを最終目的地として濠州タスマニヤ島まで約四週間に近い七千キロの船旅に出たのです。

その参加の決心がついたのは、日本の極地研究センターの村山雅美氏が体力さえ許せば千載一遇のチャンスだと私に勧めたことなのです。理由の第一は現在の日本の状況では日本が主体となって民間人を南極に旅行さすことは不可能である。第二はアメリカよりの誘いのある時は来年も必ずあるとは断言出来ない、国際事情がいつ変化するかわからない。第三は旅行の幹部に英国の世界野性動物財団会長であったの南極探検家で悲劇的な遭難をしたスコット郷の長男であるピーター・スコット氏、そして同じ英国探検家ジャクルトンの甥のキノス・シャクルトン氏、そしてアメリカの世界的鳥類学者のピーターソン博士

達の参加指導である。

第四は、アメリカの南極冷凍作戦司令を七回にわたって実行して来たマグドナルド退役海軍大佐の参加である。氷海航行についての手腕家としては世界で彼の右に出る者は現在いないということでの際は非行くべきだと心に決めたわけです。南緯五〇度から六〇度にかけての暴風圏も彼のみ低気圧の谷間を縫って船を安全に航行出来る人だからだというわけです。一度は百十キロだから往復二千キロです。冬が近くなるとその幅が広く長くなるのです。船は事実最高左右に三二度、前後に一五度の動揺を記録しました。

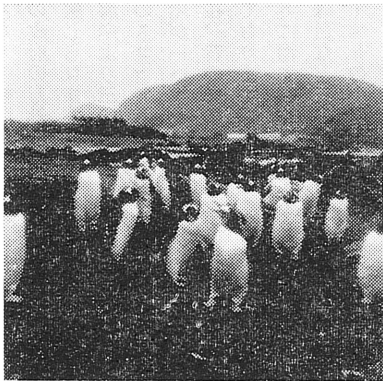
一月九日ニューヨークから日本の参加者の面接を兼ねて団長リンドブラッドが帝國ホテルに來たのでとりあえず五人の参加者と外務、運輸、文部の三省より係官が臨席して報導関係者と会したのです。運輸省としては南緯六〇度より極点に対しては受持範囲の外にあるので団長の安全航海の確認のみを知るために出席したというわけです。外務省については南緯六〇度以南は日本は南極条約の調印国であるが日本の民間人が南極に旅行する法律の細則についてはまだ出ていない。諸外国と同じ様に日本も南極に基地があるので郵



便記念切手の発行は考えているという程度で  
した。随って外務省においては国連局科学課  
がこの南極については実務担当課のやうで  
す。文部省は民間人が一人でも多く南極を知  
ってほしいと申しております。昭和基地の理  
解度を深めて頂きたいわけです。出発に当っ  
て誰でも生命保険に加入するわけですが欧  
米、東南アジアの旅行のごとく簡単に加入が  
出来ません。

南極への旅行について生命保険会社は正式  
の払込保険料がまだ決定していません。  
そして日本ではすぐ払込が出来ないので全  
部、米国のニューヨークで特別の話をな  
し、ニューヨークサイドで日本の海外旅行の  
最高の三倍を支払った次第です。また旅券も  
行き先欄については殆んど白紙に近く通過國  
もプリントがしてないと言う有様で全く南極  
に対しては日本政府も関接的存在のかつこう  
です。税関もフリーパスの形です。日本政府  
も民間人もアメリカ合衆国より広大な、日本  
の三十九倍もある南極大陸にも少し長期的な  
見とおしを持って昭和基地を基点として力を  
注いで行けないものかと思うのです。六十年  
前に白瀬中尉が二百五十トン程の小さい開南  
丸という船で南極大陸に上陸し、今尚南極大

陸に大和雪原や白瀬氷河の名前が残っていま  
すが日本は諸外国のごとく後統部隊がつつか  
ないので宝物を捨てているかつこうです。や  
はり日本は貧乏国であるということ。そして  
南極に関しては白人以外では日本オンリーと  
いったことが今の現状を作っているように思  
いました。やがて十七年後には三〇年間の南  
極条約による領土権の凍結が解除される時に  
なるのですが日本の昭和基地と日本の南極の  
経営について多少の不安が感じられます。



マックオーリー島のペンギン鳥

かかって、日本の昭和基地をはじめ作る時  
に東京で当時の文部大臣の松田竹千代が日本  
の科学者の道楽には金があまり多くかかり過  
ぎると出発の時挨拶をされたことを村山氏は  
いっておられるが、実際南極を知らない人  
には当然の発言と思われれます。けれど一度南極  
をみれば文相の発言など全く笑止千万癡戯に  
等しい愚言だと思われれます。南極に行つて初  
めて世界の形が考えられるように思われま  
す。南極条約につづいて宇宙条約が結ばれた  
今日、人類の行動範囲が大変な変化をしてき  
たのです。私の体重は五六キロですが今では  
大気圏外に出た時に重力に対しての考え方が  
變つて来た。また、人間が月の世界に行く様  
になつて来た。大気圏外へ出るまでに一キロ  
の重量が四〇万円かかる現在一〇年以内には  
十分の一の四万円にまでさげるとアメリカは  
研究をすすめ大変な計算まで現在では出来てい  
ます。日本は以前から南極の海では外国が眉  
をひそめる程鯨取りには一生懸命ですが、地  
味な共同の科学研究についての協力は、まだ  
まだ物足らない様です。結局日本国の支援不  
足が原因です。日本はギブ・エンド・テーク  
の精神にかけているといわれています。エコ  
ノミック・アニマルといわれる点も将来の日  
本のために国民の一人一人が、十分考えなけ  
ればならぬ点だと思えます。それに、南極圏  
と大陸に人類が住みつく様になつて僅か十年

余り、それも大陸には国際地球観測年の一九五七年以降のことであり、越冬期には僅かの基地となって総勢五〇〇名足らずで一カ年の研究に活動する日数も僅少であるからまだまだ未知の大陸なのです。

それに人間生存の水も殆んど水の蒸留水に頼っているし米国のみ原子力による海水の淡水化装置でまかなっている現状で水の生産原価も相当高価なものです。生産量も僅少です。アメリカ基地の油や水も全部電熱でカバーされた。パイプラインが相当な距離を縦横に走っており、暖房等も余熱利用で新西蘭基地は致しており、この米国マクマード基地や新西蘭のスコット・ベースは南緯七八度近くなので濠州の南端や新西蘭南端からは三千五百キロも離れたところで、極点が一番近い大きな基地です。ロス海の一番禺にありロス島の露岩台地上にあります。玄武岩の黒い台地です。米国基地は資金的に科学財団が大きく援助し海軍が支援しており油槽船が多く出入するので海水氷の排除には注意を払っている事が良く理解出来ます。日本の昭和基地など富士一般に何もかもまかしきっているの誠で無理です。富士も以前は文部省所属でしたが、今は自衛隊所属となりました。けれ

ども氷の排除について他の船を送らない日本の政府の方針について理解出来ない面が多々感じられます。この米国のマクマード基地の海岸より三〇米離れたところに七〇年前英国のスコット隊が南極探検に最初建てた探検小屋が「ハット・ポイントの小屋」といって現在、昔のまま腐蝕もせず備品もそのまま残っておりです。南極にブリザードという雪嵐は実に物すごく視界一米もないものでスコット隊員など三〇米離れたマクマードのハットポイントの小屋より船に帰えることすら出来ない位で隊員が全員、手をつなぎ伸ばして船をさがし求め帰ったことが今に伝えられております。昭和基地近くで福島隊員が雪嵐の中に小屋にかえれず、探すことも出来ず遭難した事。また古くは、極点よりスコット隊がエバンス小屋に帰える時に食糧を貯蔵しているワントンデボの近くで全員遭難したのも皆、南極独特の予測出来ない悪い条件に出会ったことが原因なのです。マクマードでも、この辺の緯度になると空から降る雪は少なく横なぐりに来る氷の微粒子です。海岸近くの山の斜面には砂塵が舞上るごとく氷の微粒子即風となって吹きあれています。まだまだ南極大陸は気象についても宇宙線や地磁気や地質の

面でも生物学に関しても地震でも科学の色々の面に未知の世界と言っても過言でないと新西蘭基地のグレイマトックス司令官は申しとおられました。最近アメリカでは一七〇〇米の氷のサクガン機が出来かかったそうです。何分にも平均二〇〇〇米位の氷が大陸を覆っているのですから当然、南極大陸の地質を知るためには必要なことでしょう。私も一九〇〇米の氷の下の石を土産に司令官から頂いてかへりました。基地から他の基地に走る雪上車のキャタピラーも全部ゴムのカバーをかぶせて走って居ります。氷に対する金属のモロサを物語っているのです。

冬になると零下四・五〇度の気温はざらのようにです。大陸の最低は零下華氏一三六度です。またロス海の棚氷の面積だけでも日本全土の面積と申しますし、ロス海を横切っている棚氷の長さも東京から下関までは充分あるのです。高さも平均三〇米位ですから全く「白い万里の長城」のようです。ニュージーランド南端から船で五日間キャンベル島は南緯五三度で眼にする地球上での緑(ミドリ)の南限です。

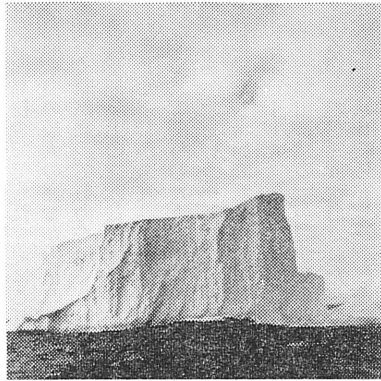
また、南極は無菌の大陸であるといわれます。風邪をひいていても南極にゆけば治る。

また反対に健康人が南極から欧国にかえると風邪をひくという位、菌の生育し難い大地なのです。一般に北極の定義は一つですが南極の場合は三つ位に解釈されております。その第一は法律では南緯六〇度以南の地域といふことです。第二は気象学の立場からは南緯低圧帯のコンバージェンシーという暴風圏からといわれております。第三は生物学者たちはペンギン、アザラシ、また植物の生態等よりして南緯五〇度位から南極といっている様です。

いづれにしても南極は将来、世界が地球化より宇宙へと時代の速度をはやめている現在大きな意義を持って浮びあがって来ているのです。日本にペルリーが下田の沖に黒船で来た時代に英・米・仏等の国々は南極の海にまた陸に足跡をのこしているのです。そして連続した努力を払って今日に來ている事実をみて、日本の政府や国民の考え方について本當の独立国家としての日本がいつ来ることかと思ふ次第です。

日本人があまりにも長い年月の間小さな島国に閉じこめられ官僚政治にならされて来た日本人の生活と考え方が現代の国際社会には大きなズレを生じていると思います。

指針をたず迷っている日本とわれわれ国民について色々考えさせられるものが非常に沢山あるのです。日本は国民主権のまだ健全に発達していない国家だと思えます。世界から離れた十六カ国の管理共同体として国連の



テーブル状氷山

もとにある南極大陸への僅かの日数の旅でしたが、私に大きな意義のある収獲を与えてくれました。

(日本山岳会、日本極地研究振興会員)

## 「白城会名簿」 発行

姫中、西高生をつなぐかなめとなる名簿が改訂発刊されました。ご希望の方は姫路西高白城会係まで。代金七〇〇円、送料二〇〇円。

会員は日々異動しつづつあります。名簿は白城会が続くかぎり改訂を続けねばなりません。しかし、一万五千を越える会員の動きを本部役員だけで一々把握することはとうてい不可能です。

転居、転職、結婚などの際、新住所、職場や新姓をぜひ西高内白城会係までお知らせ下さい。

# じ 挨拶

—— 全ては皆様のおかげでした ——

## 空地純一 (姫中24回)

「貴方にとつては誰にもまして懐しい思い出の白城会通信第八号が近く発刊されますよ。何か感想でもお寄せになりませんか。」と親切な西岡先生のお電話、本当に嬉しく存じました。

昭和二十六年の七月、柄にもなく白城会理事長の大役を引受け我にもなく大奮闘と覚悟致したものの、それは私の力だけで容易に果し得るものではありませんでした。万事草創期における幾多の悩みをよく克服され、今日の発展の基礎をお造り下さった栗田前理事長はじめ諸役員の方々のご指導とし援助、代々の校長及職員の方々のご厚意、そして同窓会諸君の絶大な熱意のこもったご協力のおかげであったと固く信じております。

忘れも致しませぬ、その年の四月、賀集先生が母校々長としてご来任の砌、先ず第一に先生のお目に止まったのは、県下最古最優秀を誇る母校々舎の哀れ老朽の姿でした。よし、私任中必ず改築して見せると固く決心なされたのが抑々の発端で、その後先生の素

晴しい誠意と根気はよく県当局を動かし、育友会も同窓会も共に一心に応援申し上げ完成したのが、当時堂々たる白亜の殿堂とたたえられた現西高校舎でした。更にこれに動かされた同窓会の最大の発奮からかねての希望を果すべく断然立って努力を尽くした結果がこれまた予期以上の立派な白城会館となつて現われました。しかも設計監督からあらゆる工事に到るまで関与した人達のすべてが本校の同窓であったという嬉しい条件が相重なり、お互に励まし合い調意を尽して頂いたことは本当に幸せでした。

歌碑「鷲山に秋の」が建つたのもこの時です。名簿は二、三度改訂されたが今度は完全に近いものが出来上るとのこと。多年待望された会報がようやく三十九年七月その第一号が出版された時。喜びはたえようもありませんでした。

こうしていろいろと思ひ起してみると、何から何まで関係各位と同窓諸君の緊密なる協力以外に何物もありません。私はひそかに白

城会館竣工を引退の花道に致したく念願しておりますが、それもならず、結局昨年の総会においてようやく志を達し、その際皆様方より頂戴致した身に余る感謝のお言葉と記念品は、私生涯の無上の宝物でございます。今として二十年近く無事に勤めさせて頂いたことがまるで夢のように思われてなりません。



現理事長安平氏より感謝状を受けられる空地氏

さらば皆さん、この懐しい誌上で改めて心から皆様のお心尽くしを感謝申し上げます。とともに皆様方のご健康と母校並に白城会の益しご発展あらんことをお祈り申し上げます。同時に安平新理事長はじめ各役員の方々に絶大なるお力添を賜りますようお願い申し上げます。ご挨拶を終わります。

## 紹介

### 「愛しのタンザニア」

尾田稻子さん（西高十三回生）は日本青年海外協力隊員として、まだ日本人の行ったことのないアフリカの奥地へ派遣され、活躍されましたが、今度、タンザニアにおける二年間の生活記録が出版されることになりました。

七月二十日頃に全国の書店で発売の予定です。「定価五百八十円」三〇〇頁（B6版）

寿賀義治氏（西高12回）

### 句集「滑走路」出版

二十代の最後を記念して寿賀義治氏が句集「滑走路」を出版されました。西高時代から二十九才までの作品二百二十四句を収録、伝統俳句にあきたりず、前衛的な手法を駆使して綴った意欲的な句集で、氏は「この句集は二十年代のけじめをつけるために出した。これを次の段階をめざす滑走路にしたい」とはっきりしておられます。

山崎為人氏（姫中46回）

### 季刊俳誌「門」創刊

母校教諭で俳人の山崎為人氏がこの四月に季刊俳誌「門」を創刊されました。氏は昭和十一年より作句生活に入り、戦前「瑠璃」「琥珀」同人、現在は「寒雷」「杉」の同人として活発な活動を続けておられますが、この度周囲の人々から新たに氏を中心とする俳誌を出そうとの機運が高まり第一号が四月二十八日に発行されました。次号（七月号）からは雑詠欄を設けて、一般からも広く作品を募集、特に若い世代の新しいエネルギーの成長に期待し、将来の播磨文芸を支え、さらに中央俳壇に通じる後継者の育成に力を注ぐことを大きな目標に置いているとのこと、各方面より注目を浴びています。皆さんのご声援をお願い申しあげます。

### 白城会文庫目録追加分

著者

書名

高橋 三郎（姫中50）ドイツから見た日本

（増補改訂版）

無教会精神の探究

沖繩問題とキリスト者の責任（共著）

現代の危機はどこにあるか

田村 善太（姫中55）太子町史 史料編

原 泰良（姫中33）絵のある人生

石川 一夫（姫中33）童話青い目の良寛さん

ベイカー物語（稿）

五十嵐播水（姫中27）句集老鶯

阿部 知二（姫中32）世界文学の歴史

佐藤文太郎（姫中51）鶏助帛

（生野義拳始末記）

### 本紙表紙について

この城、同窓のみなさんにはもう一度お目にかかるとは思いません。この度改訂発刊される白城会名簿のために尾田龍氏（姫中36回）にお願いして、描いていただいたものです。名簿の表紙は山吹色に黒というあざやかなものです。

その後、白城会通信編集の話し合いの際「名簿の改訂記念の意味を込め、通信の表紙にも使わせていただいたら」という意見が出尾田氏のお許しを得て、ここに載せることになった次第です。

## 母校職員の異動

(昭和四六年度)

離任された先生

お名前	教科	ご転出先
林 義一	校長	退職
宮内 久雄	保体	退職
改発 孝昭	数学	県立龍野高校
竹上 健一	主事	県立姫路南高校

来任された先生

お名前	教科	前任校
豊岡 正見	校長	県立龍野高校
加藤 文則	数学	県立高砂高校
宮内 雄治	保体	新任
石間 孝	主事	新任

## 交遊抄 植村 光雄

旧制姫路中学と姫路西高の同窓会を白城会という。その四十二回生の会がさる四月十八日開かれた。同期生にとって卒業後満四十年にあたるのである。集まった人々は三十四人。そのなかには英語の主任教諭として存学中ずっとお世話になった柴垣武夫先生が加わっておられた。六十五歳とも思えぬ若々しさで昔のままの黒々とした髪と長身でスマートなスタイルにまず驚き、かつ祝福した。先生はわれわれの入学と時を同じくして二十二歳の若さで教育者としての人生を踏み出され、われわれには格別の情熱を注いで下さった。白城会の席で先生から思いがけない貴重な記録をみせていただいた。それはわれわれが入学した年から始まり、三年、四年と進級するつど将来何になりたいかを書き込んで先生に提出していたメモをきちようめんにつづつて保管されていたのである。

出席者一同、興味深くそれぞれの少年時代の筆跡をみて、現在の地位、境遇と比べ懐旧にふけた。得がたい収穫であった。

われわれ四十二回生は当時から名声のほまれ高かった姫路中学にあり黄金時代を築いた

とうぬばれてゐる。出席者のなかからおもな人々をあげると一。大阪市大学長森川晃郷君、姫路工業大学学長代理小村雷教君、灘高校校長勝山正躬君、兵庫県立龍野高校校長西牧茂夫君、姫路市立琴ヶ丘高校校長沖嶺徹也君、神戸大学経営学研究所教授米花稔君、北野病院元副院長・現精神科医長泰井俊三君、神崎郡医師会長三木順一君、姫路市医師会長池内光次君、兵庫県住宅供給公社理事左納一郎君、姫路商工会議所副会頭泉隆義君、敷島紡績常務古市正三君、大阪チタニウム製造取締役高谷勇君などである。

われわれ同期の桜はいまや花盛りといっても過言ではない。ちょうど年齢からしてもその時期になったのであろう。しかし人生の後期に手が届きそうになると気持ちは若くても寄る年波はかくせないものだ。ことばのはしばしに出てくるものは子供や孫の話か、いつまでも長生きしようとする切実な願いであった。

飲酒は微量で持参した酒がだいぶあまり、ちょっとわびしい気になったが、それでも意気軒高に応援歌「桜の葉風そよそよとかおるもゆかし国土城、ああ英傑の血をうけて…」を絶叫し、今後毎年一回、必ず会合することを約して散会した。

(住友商事専務)

## いあつわし 林 義一

この三月末をもちまして母校を辞し去るとともに、三十九年にわたる教員生活に終止符を打つことになりました。本校には東京高師卒業後すぐ数学の教師として十一年間、校長として最後の三年間、ご厄介になりました。

赴任したのがほん昨日のように思いますが何時の間にか日も過ぎ去り、今あらためて反省してみますと、この間何等母校のためお役に立つこともなく、甚だお恥かしい次第です。ただ、最後の日まで学校に愛着をもって、一生懸命勤めさせて頂いたことが何よりも幸せであったと、喜んでおります。余生はゆうゆう自適の生活と思っておりますが、おすすめ下さる方もありまして県教育委員会内で学校経営の相談員として高校の校長先生、教頭先生、事務長の方々の相談相手を仕事としております。

省みますと赴任してすぐとりかかったのは創立九十周年記念式であります。七月一日が記念日に当りますが気候の点を考え、秋いに延ばしたものの何分準備期間も短かいことでもありますので、ごくごく簡単にといいまして白城会や育友会のご援助を仰ぎ、十月に挙行

致しました。準備期間や費用の関係上、全会員の方々にそれなくご案内できず誠に失礼致しました。会員の方々にさぞご不満のことと今さら乍ら申し訳なく思っております。今年には九十三年に当りますが、来る百周年記念式は盛大に挙行して頂き、私も是非出席したいと楽しみにしております。記念式につきましては一番時間のかかるのは、記念誌の編集であります。その資料は九十周年記念式より引き続き蓄積するよう校長室にロッカを三個置いておきました。どうぞ何か資料がございましたら学校へご寄贈あるいはご貸し下さるようお願い致します。九十周年記念式のお託びやら、百周年記念のお願いをする次第でございます。

その後長髪問題で小波が立ちましたが、皆さん方の心からのご協力のお陰で大したこともなく平静になりました。これも考えようによれば小さな問題であります。その裏にあるものは決して軽視する事ができなかつたと思ひます。幸いその年の進学状況からみまして勉強の方には影響がなかつたようでした。

今後の西高の問題は理科室の増築と選抜制度お件などあります。前者は白城会の方々の御協力を得、よい方向に進んでおります

が、選抜制度はこれからです。最近問題となつてゐる総合選抜制度は福崎地区を除外して県立三高校の普通科六校の収容総定員を一括して選び、これを各校に配分することは誰しも分つていますが、果してどんな方法で配分されるか、これが大きな問題であります。それには大きくみて三つの型がありまして、その一は志望による、その二は居住地による、その三は内申などの成績などです。まんべんなく平均して分けるという三つであります。この三つのうち、志望による以外は大きな欠点をもつております。第二の居住地による分けは高校の位置が最初からその積りで選定されていらないので非常に不自然になり、また個人の志望無視ともなります。第三の成績による分けは人間を物品や鳥やけもの扱いにするもので人権無視と言ふべきであります。第二、第三何れも志望無視であり人権問題であると共に希望もしない生徒を預つて教育することは非常に困難であることを力説してまいりました。何卒豊岡校長先生を中心としてこの問題がよい方向で解決するようご協力賜りますようお願いいたします。

最後に終始、暖かく御支援賜りました白城会の方々に厚く御礼申し上げ、ご挨拶と致します。

# 修学旅行

姫路西高三年

阿部直哉

毎年、卒業式が近づくときと新聞部が卒業生に對してアンケートをとるのですが、その中に「三年間で最も印象に残ったものは何ですか。」という項があります。「修学旅行」は

体育祭、文化祭とともに常にその上位にランキングされています。一年生の頃そのアンケート結果を見て、「この薫垂めが」と思ったものです。余りにも卒業式の答辭じみていると感じたのです。

ところが、修学旅行を実際に経験した今になってみて、修学旅行がアンケートの上位を占めていた理由が納得できるようになりました。それどころか、卒業するときには、アンケートに「修学旅行」と書きかねません。

何がそんなに良かったのか。僕たちは北九州を回りました。僕の印象に強く残っている事、それは北九州の自然（それは本当に素晴らしいものでした）ではなくてクラスの仲間

と一緒に寝て食べたことなのです。僕たちのクラスには、歌気遣いの気のある奴が多くて、百二十数曲あるという歌集を大部分、歌いつくしました。ある日の晩には、四人ほどで肩をくんで学生歌や「友よ」をうなりながら、旅館街を逍遙しました。ある朝には、彼女と並んで夕張岳の朝日を浴びました。それらは、今の僕にとっては幻想とも思える思い出です。そう思い出でしかありません。

しかし、僕はそこに希望を見いだすことができたはずで、みんな自然で、こだわりがありませんでした。『連帯』こんな言葉を出してきたら、皆に笑わそうです。が僕にとって、少なくとも二年生のときには、それが生きがいでした。そして、修学旅行はその小さな結晶でした。

僕がホーム・ルームの重要性を説くときいつでもこう言っていました。「ホーム・ルームという、血縁でも利害でも結ばれていない組織は、ほかにはない。だから、そこには無限の可能性があるはずだ。」今でもその甚だ、幼稚な考えは変わっていません。しかし三年生であるということが一つの大きな障害となつて、ホームルーム作りは容易ではありません。

僕自身ホームルームの重要性を説きながら

も、大学受験を考えるから自己矛盾を感じないわけにはいきません。それでなくともホームルームなどくそくらえという人がいます。月曜日の四時間目にもたれるロングホームルームがしらけきった時は、みじめなものです。

西高では三年生に多くの特権が与えられています。文化祭では、学級劇に、優先的に参加が認められ、体育祭での、仮装行列、ファイアストーム等も三年生だけの特権です。ですから、三年生に對する特権の良否はともかくとして、ホームルーム作りはこれからだと考えています。そして、修学旅行の思い出がますます光彩を放つということにならないようにと願っています。

## 白城会文庫について

本紙では、会員の著書をできるだけ紹介してゆきたいと思えます。出版された方は、姫路西高内白城会係にご寄贈下さい。紹介の上、西高の図書に置き先輩の図書として西高生にも閲覧の機会を与えたいと思えます。



## 命の春のこの三とせ

姫路西高三年

衣笠左江子

今の西高生のほとんどは、この言葉に一種の白々しさを感じるのではなからうか。今年の校内弁論大会でも「西高には何か欠けている」「西高生は利己主義だ。ひきょうだ」「もっと情操教育を」などの声を聞いた。三年生の今の私の考えを述べてみたい。

今の西高は平和だと言う。でも、そうではない。若さの喪失した名目上だけの集団なのだ。実はバラバラの孤立状態。自分の世界を持ちながら、隠して接する。本当の自分が出せるのは、二、三人？ いやないかもしれない。人一倍他人の世界に近づきたい。皆は利己主義と言う。だけど私は「スケールの小ささ」と言いたい。周囲を気にせず、利己主義に徹している人は少ないと思う。こんな二つのタイプがある。一つは真の勉強―疑問を感じたらその場で立ち止り追求し、何からでも答を得ようとする極少数型。あと一

つは、試験の厚さだけで、身につけようとしていない型。立ち止まっていたは時間がない現状だけど、前者は一時的に遅れてもその後秒に水がしみ込むようにすべてが自分を養うものとなると思う。教育体制や先生に向ける不満もあるが、自分の中の出発点を整える方が先決だと思う。社会へ出ると当然のことに高校生は盲だ。真の勉強によって受験体制をのり越えてやろうというスケールの大きさが少ないのではないか。先生との間にしても、文句はある。気軽に話したいけど、あえて行く人は少ない。何もやらなくても三年間、そうやって出ていく人も多からう。自分から求めなければ何も来ない西高において、自分に課題をつきつけ、ぶつかり、倒れ、おきあがるスケールの大きな青年になりたい。

今一つ、孤独の裏には名だけの集団の中への個性の埋没があるのではないか。先生はふとしたときに表われる生徒一人の良さを知っていらっしやらないと思うし、生徒も集団としての、また短い授業の中での先生だけで、一人の人間として個性を知っているだろうか。生徒間でもわかっているだろうか。知ることは第一歩である。当然年令の差によって考えの差はある。しかし話し合おうとする心

の通じ合いないのは集団じゃない。生徒の若さと先生の知恵、これほど強いものがあるうか。生きた集団となってこそ、社会悪にも立ち向かえ、社会へ出てからも役に立てるのではないだろうか。

今の西高生は「自由」になりつつある中で窒息している。「春」というのはのびる時なのだ。若者は大人にない純粋さとエネルギーをもっているはずだ。隠された力や才能を良い方向に思いっきり伸ばしたい。そのためにも、立ちどまって真の勉強をすることは必要だし、脱皮すること、そして先生の助力も要る。高校とはその為の集団であってほしい。私たちは、本当の「命の春」を通して、「青葉の夏」へ向かいたい。

### 白城会総会について

白城会の構成人数も、西高卒が姫中卒の数を越えました。ところが総会では相変わらず姫中グループ多く、西高グループはまばらです。これからの白城会を背負うために、西高卒グループは総会にも大いに参加して下さい。

昭和四十五年度

## 白城会総会報告

昭和四十五年度白城会総会は八月十六日(日)午後三時より、母校の白城会館で盛大かつ厳粛に行なわれました。遠くは東京方面からの参加者もあり、遠近を問わず、年令の老若を問わず、同窓のよしみで、多数の方々に集って頂きました。空地理事長開会の挨拶に続き、物故会員に黙祷をささげ議事に入りました。本議事において、本会のため永年理事長に就任して頂いております。空地純一理事長(姫中24回卒)が辞任され、安平康副理事長(姫中38回卒)が理事長に就任。後任副理事長に柴垣武夫氏(姫中34回卒)と竹田二郎氏(姫中45回卒)の就任を議決、続いて空地前理事長に記念品を贈呈し、永年のご尽力に対し謝意を表しました。他、役員のご改選会務、会計の報告および承認等がされました。

本年の総会の講師は、前近鉄球団社長、野球評論家の芥田武夫氏(姫中33回卒)で職業野球草分けの時より現代まで、また球団内の苦勞話など、まことに興味ある話題について

ていろいろの話を聞きました。講演後は宴会です。久々振りの会合なのでしょう。あちらこちらで話のうずです。料理も豊富、飲料物は十二分に用意されています。こんな風に書いては何ですが、参会の方々には十二分にご満足頂けたと思います。この時フト思ったことですが、この会が毎年こうして盛大に行なわれる。何と平和な時代だなーと、同窓会を通して母校を愛すること。母校のよき成長を助成しなくてはならぬ同窓会の使命感を感じました。なお、終りになりましたが常日頃

本会運営等に、ご援助、協力を頂いています。母校の先生方、本部、および各支部の役員、幹事、会員などの方々にこの紙面を借りまして厚くお礼申し上げ謝意を表します。紙面の都合上、まことに粗雑な報告に終わりましたが、これをもって総会報告記事にさせていただきます。(西岡)

## 昭和四十五年度白城会会計報告

項 目	収 入	支 出	残 額
一般会計(名 維持会費等)	二、五五三、八七三円	九八一、〇六三円	一、五七二、八一〇円
白城会館運営	一三八、三五二円	二八、二〇〇円	一一〇、一五二円

上記監査の結果正当なものと認めます。  
昭和四十五年八月十一日

以上の通り報告いたします

昭和四十五年八月十六日

監 査 岡 本 徳 次 郎  
監 査 龍 田 謙 三

理 事 長 空 地 純 一

## 姫中・西高野球部O・B会の集いの報告

校友諸兄お元氣ですか。昨年一昨年と地元  
に居住されている校友諸兄ばかりで会合して  
おりましたが東京の諸先輩より合同で、野球  
部O・B物故者の慰霊祭を開催してはとの申  
出があり、八月十六日に開催致しました。誠  
に結構なることとて、西岡校内理事と相談致  
し、午前中は現役と試合を行ない、午後白城  
会館にて行ないました。

何分お盆のこととて僧侶が多忙で間に合  
いませんでしたが校友諸兄の心よりの一分間の  
黙祷で、亡き方々も万巻の経よりも喜んで  
ただけたのではないかと思えます。暑い最中  
でありましたが東京よりはるばるかけつけて  
いただきました先輩連はユニフォーム持参の  
方もあり年令は六十才にもなられるのに元氣  
なもので3回まで試合を挙行致しました。カ  
ンーという快音は殆すれど肝心の足がいうこ  
とを聞かず、氣の毒でしたが青春の想い出は  
つきず、姫中精神を想い出し欲は最高調白城  
会総会の時刻も近づいたので総会へ出席する  
ため名残りを惜しみながら閉会しました。残  
念なこと西高O・Bにも案内状差出しまし

たが、一名の参加者もなくさびしいことでし  
た。出席者は次の方々でした。(塩見生)

水田弥太郎(27回) 芥田武夫(33回) 茂見義  
勝(33回) 柴垣武夫(31回) 淵岡美士磨(34回)  
福沢英男(35回) 足立良平(36回) 丹羽勇(36  
回) 枯梗利(36回) 田中修(42回) 山本英雄  
(46回) 釣常雄(48回) 渡辺武雄(48回) 本  
間祥(48回) 長尾俊郎(49回) 塩見一郎(49  
回) 以上十六名

なお、当日佐伯(33回) 鎌田(41回) 下村  
(西6回) よりの寄付金、会費の残り等より  
バットボール多数母校野球部へ贈呈しておき  
ました。小谷顧問から礼状がきております。

### 「維持会費」納入 についてのお願い

現在本会の会計は、従来よりの「積立金」  
と母校姫路西高校在校生が月々分納入してい  
る「入会金」と、卒業生会員の納入される  
「維持会費」とで維持されています。卒業生  
の会員の皆様方からは「維持会費」として、

年額百円ずつご送付頂いております。新入生  
の入会金のみに頼るのは甚だ心苦しいもので  
す。同窓の方々も振って「維持会費」をご送  
付下さいまして、私達の白城会を充実した会  
に盛り上げて頂きたく存じます。

「維持会費」は三年に一回、三百円を納入  
して頂くことにしております。未納入の方は  
是非とも会費納入をお願い申し上げます。同  
封の振替用紙でご送付下さい。諸般の事情ご  
明察の上送金頂きますようお願い申し上げます。

### 『白城会通信』原稿依頼

白城会では、毎年一度通信を発行してあり  
ます。さて、そこで問題は原稿の依頼、でき  
るだけ多くの方に興味深い記事を載せたいと  
編集者は努力しておりますが、皆さんお忙し  
い方が多く、ご無理をお願いできないことも  
あり、縮切に追われ四苦八苦、というのが現  
状です。さいわい今までは会員の協力により  
まずまずの紙面を作ることができましたが、  
今後は内容をさらに充実させるためにも、会  
員同志の意見交換の場としても、皆さんの自  
発的な投稿をお願いいたします。ただ、紙面  
の都合上割愛したり、短縮させていただきます  
ともありますので、あらかじめご了承下さ  
い。

# 白城会総会のご案内

昭和四十六年度白城会総会を左記の通り行ないますので、会員各位互いにお誘い合わせの上、多数ご参集下さいませう、ご案内申し上げます。姫中時代の卒業生の方々はもちろん、西高時代になりましてからも多数の卒業生先輩があります。時代を異にした方々も、また一同に会し、心を一つにして、談笑のひとつきを持って頂きたく存じます。

なお、準備の都合もありますので、出欠のご返信を頂きますようお願いいたします。(同封葉書にてご返信下さい)

記

日時 八月十五日(日) 午後一時より  
場所 母校内 白城会館(三階)

会費 八〇〇円(但し西高二十回〜二十三回生は四〇〇円)

受付 午後〇時半より

講師 戸谷松司氏(姫中50回卒・兵庫県企画部長)

テーマ 「兵庫県の展望」

## 白城会「会員名簿」

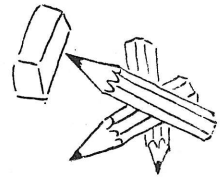
### 発行お知らせ

昨年度来より予告しておりました同窓会名簿がいよいよ発行の運びとなりました。会員総数一万六千名余の方々の最近消息の判明分を集録してあります。ただ、各回幹事、本部などと断絶し消息不明のままの方々は、いたし方ございませんでした。この名簿の発行に当たりまして、その意義を解し、広告掲載にご協力頂いた方々、消息試料収集に尽力して頂いた各回幹事、母校の教職員の方々等多くの人々の心の結晶が、この名簿を作り上げ得たことと存じます。紙面をかりまして厚くお礼申し上げます。諸般の事情上誤りも多少残しておることと存じますが、お許しを頂きたく存じます。会員各位のお手許に是非一冊を備えて、有効にご活用頂きたく存じます。経費は左の通りですので、同封振替用紙で送金下されば結構です。近くの方は姫路西高校内白城会係までご連絡下さい。

白城会「会員名簿」

一冊印刷実費 七〇〇円

送料 二〇〇円



【編】  
【集】  
【を】

【終】  
【え】  
【て】

本紙第八号は、名簿改訂と時期が重なり、ほとんどの校内理事は名簿原稿作り、広告依頼、校正にと追いまくられ本紙の編集はいっもになく手薄、出来上りはかくのごとく、はなはだ不十分、原稿をお寄せ下さった方や、これを読んで下さる方に申し訳けなく思っております。私が白城会通信の編集をやり出してすでに数回、こころでメンバーチェンジして、新鮮味のあるものと思っております。本紙に対するご意見、ご助言をお寄せ下されば、と思っております。(鳩川記)

No.8 昭和46年7月

題字は空地純一氏

白城会本部

姫路市伊伝居678

〒670-0170

姫路西高等学校内

理事長 安平 康

編集人 橘義康

鳩川晏文

永善

印刷所

明輝堂印刷

姫路市総社本町81